

北海道中央部，十勝三股におけるエゾライチョウの個体数調査

ひがし大雪博物館友の会エゾライチョウ調査グループ¹⁾

The census of Hazel Grouse *Tetrastes bonasia vicinitas* at Tokachi-Mitsumata, central Hokkaido

Hazel Grouse research group of Higashi Taisetsu Naturalist Club¹⁾

はじめに

エゾライチョウ *Tetrastes bonasia vicinitas* は、旧北区の温帯域に広く分布し、日本列島では北海道にのみ生息する（日本鳥学会 2000）。近年、北海道において本種の個体数の減少が懸念されている（北海道新聞1993年11月8日付夕刊，藤巻 1998）。野生生物の保護にあたっては個体数に関する基礎的データの収集・蓄積が欠かせない。そこで、北海道中央部，大雪山系の森林地帯に位置する十勝三股でエゾライチョウの生息数を長期に渡ってモニタリングすることにした。本稿では、1993年から2004年までの調査結果について報告する。なお、本文は川辺百樹が、数値の検定は岩見恭子が、英文は斎藤潤が担当した。

調査地

調査は大雪山国立公園の東部に位置する十勝三股地域で行なった（図1）。十勝三股は径8 kmほどの見事な盆地地形をなしている。この盆地地形は60万年前ころの大規模噴火に端を発している。このときの噴火によりカルデラが形成され、その後30万年前ころの火山活動によってカルデラ湖に火砕流が流入し、陸化したと考えられている（石井 2001，中川・高島 1999）。盆地のほぼ底部に十勝三股の集落（標高670m）があり、ここから放射状に周囲の森林へ林道が延びている。これらの林道のうち6本に4 kmのセンサスルートを設定した。各ルートの始点と終点の標高，緯度，経

度は次の通りである。

十三の沢林道 A1: 640m, 43°29'33", 143°8'56" A2: 900m, 43°29'40", 143°11'45"

十六の沢林道（一部音更川本流林道も使用）B1: 645m, 43°30'6", 143°9'3" B2: 823m, 43°29'45", 143°6'43"

十四の沢林道 C1: 670m, 43°30'33", 143°9'21" C2: 830m, 43°30'35", 143°11'59"

シンノスケ三の沢林道 D1: 677m, 43°31'20", 143°9'26" D2: 902m, 43°31'32", 143°12'15"

三股置戸線 E1: 680m, 43°31'38", 143°9'45" E2: 740m, 43°33'10", 143°11'3"

シンノスケ二の沢林道 F1: 670m, 43°31'32", 143°9'38" F2: 720m, 43°31'53", 143°7'42"

大雪山系では一般的に標高800m付近で針広混交林帯から常緑針葉樹林帯へ移行する。十勝三股盆地の底部の標高は約670mであるが、落葉広葉樹が乏しく常緑針葉樹の優先する森林となっている。十勝三股では1939年の鉄道の開通により森林伐採が本格化し、1954年の洞爺丸台風により多量の風倒木が発生した。これらの影響により、伐採前に1 ha当たり400立方m程あった十勝三股盆地の材積量は、現在200立方mに満たないと推定されている（鹿児島大学久保田康裕氏 私信）。したがって、センサスルート沿いの森林も疎林化が目立ち、成熟した常緑針葉樹の森林はほとんどない。またセンサスルートの多くは、川沿いの林道に設

1) ひがし大雪博物館 080-1403 北海道河東郡上士幌町字糠平 c/oHigashi Taisetsu Museum of Natural History, Nukabira, Kamishihoro-cho, Hokkaido, 080-1403, Japan

定されており、ケヤマハンノキ *Alnus hirsuta*・オオバヤナギ *Toisusu urbaniana*・ドロノキ *Populus maximowiczii* などからなる河畔林がある (斎藤・川辺 1998)。

方 法

調査は年1回行なった。1993年から1997年までは11月3日に行なったが、2000年以降は毎年10月の最終日曜日に行なった。この日程の変更はエゾ

シカの狩猟期間が1998年以降11月1日からとなり、危険を回避するために行なわれた。1998年については11月3日に予定していたが、狩猟者が調査ルート付近にも入林したため中止した。

2人から6人が一組となり、センサスルートに設定した林道を自動車で4 km先に移動し、ここを調査始点として林道をもどった。この方法は自動車の走行によりエゾライチョウを林道付近から追い払う恐れがあるが、歩行時にヒグマとの遭遇

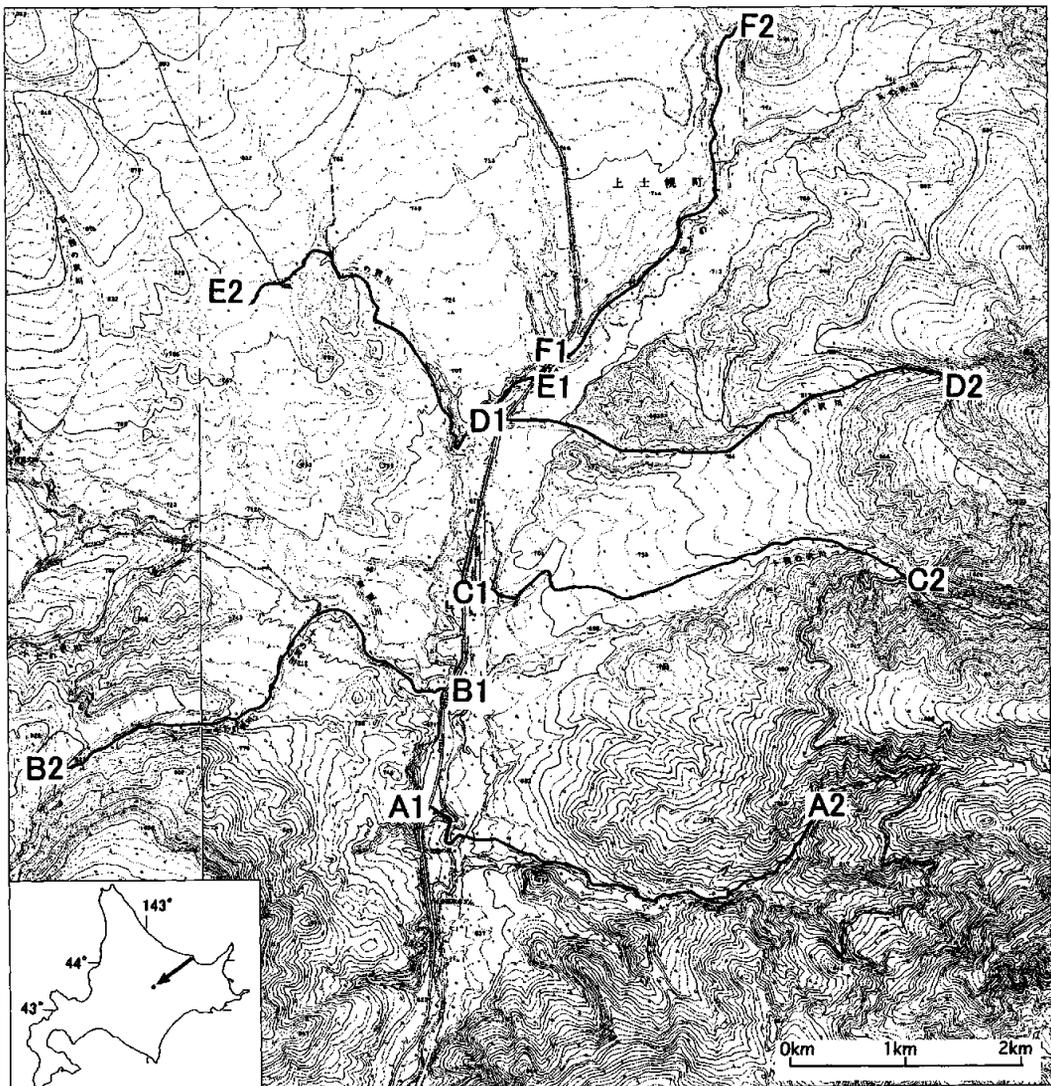


図1. 十勝三股におけるエゾライチョウセンサスルート

Figure 1. Location of study area at Tokachi-Mitsumata of Taisetsu Mountains, central Hokkaido and census routes of Hazel Grouse from 1993 to 2004.

を避けることを意図して採用した。時速 2 km 程度で歩行し，5 分間隔で狩猟笛あるいは二枚重ねた五円玉を吹いてエゾライチョウの鳴き声をまねた音を出した。そして姿あるいは鳴き声により個体数を数え，姿を観察できた場合は雌雄の確認に努めた。

調査者 会田美帆子，阿部知子，飯尾由賀，飯田智子，池田恭代，磯野あかね，磯野照弘，伊藤彩子，伊藤裕治，入交利都，岩見恭子，江口佑子，遠藤諭，遠藤千尋，遠藤真理子，大矢夏子，岡田美穂，尾形田鶴子，尾崎高博，鏡垣，片岡美和，片山徹，川辺百樹，菊地聖，北川雅啓，木谷空見子，木谷文彦，清瀬希久子，清瀬正敏，草野利見，久保進，久間田好美，後藤直美，小葉松弘憲，小林貞夫，駒崎久美，斎藤恵美子，斎藤潤，坂本佳奈子，桜木裕美，桜沢和久，佐々木理絵，佐藤正，佐野悦子，柴田響子，島田雄吉(故人)，神野貞志，神野洋子，須田修，ミリオネア・スティープン，立石みちる，田中一儀，田中康夫，玉木克憲，チュ・ヒー・ヨン，辻洋子，辻本涼子，堤公宏，寺島千恵美，長沢麻由子，永野千晶，中村嘉秀，鍋谷尚子，西上智之，沼田雅子，能勢公，能勢洋子，花田貞晴，羽場千恵，林紀雄，林節子，比企知子，樋口享軌，平田正明，平田朋子，古野亜子，星野春雄，星野美稚子，前野健，牧田勝弥，牧田英男，牧野靖伴，松田まゆみ，万中理子，三木悦子，三木洵，宗重仁，村上裕美子，村木尚子，森幸佑，柳田弘子，山岸裕，山下征夫，山城須賀子，山田和幸，山田真弓，山本三智，吉田早紀，若林ちづ子，若山美子，渡辺幸子

結 果

センサス結果を表 1 に示す。1993年から2004年までの個体数の年変動をみると，年平均（±標準偏差） 14.27 ± 5.35 （1 km 当り 0.60 ± 0.22 ）で，最小が1996年の 6（1 km 当り 0.25），最大が2002年の 26（1 km 当り 1.08）であった。年ごとの個体数については有意差が認められなかった（一元配置分散分析法， $P > 0.05$ ）が，ルート間での個体数については有意差が認められた（一元配置分散分析法， $p = 0.01$ ）。最も個体数の少なかった三股置戸線ルート（ 0.64 ± 0.92 ）は，十四の沢・シンノスケ二の沢・シンノスケ三の沢コースよりも有意に少なく（Fisher's PLSD法 $p < 0.05$ ），観察

表 1. 十勝三股におけるエゾライチョウの生息数

Table 1. Number of Hazel Grouses at census routes at Tokachi-Mitsumata of Taisetsu Mountains, central Hokkaido from 1993 to 2004.

調査ルート	1993	1994	1995	1996	1997	1999	2000	2001	2002	2003	2004	計	1km当り
十三の沢林道(A1-A2)	2	1	0	1	3	2	0	3	4	1	4	21	0.48
十六の沢林道(B1-B2)	0	2	2	0	1	0	1	3	7	3	2	21	0.48
十四の沢林道(C1-C2)	1	4	0	0	7	2	4	3	3	3	3	30	0.68
シンノスケ三の沢林道(D1-D2)	3	3	6	0	2	5	9	2	2	1	1	34	0.77
シンノスケ二の沢林道(E1-E2)	1	7	6	3	2	6	1	2	10	1	5	44	1.00
三股置戸線(F1-F2)	2	1	0	2	0	2	0	0	0	0	0	7	0.16
計	9	18	14	6	15	17	15	13	26	9	15	157	3.57
1km当り	0.38	0.75	0.58	0.25	0.63	0.71	0.63	0.54	1.08	0.38	0.63	0.59	0.59

個体数の最も多かったシンノスケ二の沢ルートの6分の1程であった。また十三の沢・十六の沢もシンノスケ二の沢ルートより個体数が有意に少なかった (Fisher's PLSD法 $p < 0.05$)。

考 察

秋季における本種の重要な食糧は果実である (藤巻 1998)。したがって、ルートによる生息数の違いが果実とくに多肉果の現存量と関係している可能性がある。しかし今回の調査コースでの食糧となる植物の分布状態について把握していないので、この点について言及することはできない。三股置戸線ルートでは個体数が他のルートより少なかったが、このルートの場合考慮しなければならないのは、中の川という流量が多く、河道の広い河川がルート沿いを流れていることである。河道そのものはエゾライチョウの採食場所とはならないので、他のルートより生息面積が狭められているとみることができる。このような条件が生息数の少なさに反映している可能性がある。

藤巻 (1998) は、北海道各地の森林で 2 km のライントランセクト法 (線状調査法) によりエゾライチョウの個体数調査を行なっている。それによると、常緑針葉樹林で 0 ~ 2 羽、針広混交林で 0 ~ 3 羽、落葉広葉樹林で 0 ~ 3 羽との結果が得られている。

今回の調査地は、伐採などの影響を受けているが、常緑針葉樹林に区分される森林である。ここでの本種の生息数は平均で 1 km 当り 0.6 羽、最大で 1 km 当り 1.08 羽 (2002 年) であった。したがっ

て、北海道の常緑針葉樹林における一般的な生息数とみることができる。

センサス調査においては、エゾライチョウの生息に影響を及ぼす人為的攪乱を極力排除しなければならない。しかし今回の調査では 1993 年に調査ルートでエゾライチョウの狩猟が行なわれ、1995 年に十三の沢コースの一部で伐採作業が行なわれた。これらがエゾライチョウの生活を攪乱し、センサス結果に影響をおよぼした可能性がある。また、1994 年は強い降りではなかったが雨天であった。このような気象条件も調査結果に影響したと考えられる。したがって、今回得られたデータには限界性があるものの今回の調査結果からは、この地域において本種の個体数が減少傾向にあるとする証拠を見出すことはできなかった。

引用文献

- 藤巻裕蔵, 1998. エゾライチョウ, 109pp. 帯広畜産大学野生動物管理学研究室, 帯広市.
- 石井英一, 2001. 北海道中～東部, 鮮新世～第四紀の火砕流堆積物層序と TL 年代: 珪長質火山活動の変遷と十勝三股カルデラの提唱. 北海道大学理学研究科修士論文.
- 中川光弘・高島 勲, 1999. 北海道中央部, 十勝三股層中の軽石の TL 年代. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, 21: 13-16.
- 日本鳥学会, 2000. 日本鳥類目録改訂第 6 版, p75, 日本鳥学会.
- 斎藤新一郎・川辺百樹, 1998. 音更川支流シンノスケクジュベツ川 (中の川, 十勝三股地区) におけるオオバヤナギ河畔林の現状について. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, 20: 1-12.

Summary

We took the censuses of Hazel Grouses at Tokachi-Mitsumata in Taisetsu Mountains, central Hokkaido from 1993 to 2004. Census routes were set up in 6 logging roads. The distance of each census routes was 4 kilometers. Censuses were conducted once every year in October or November. As the result, the number of Hazel Grouses was 0.59 on an average, 1.0 at maximum and 0.2 at minimum per kilometer. This was general number of Hazel Grouse in evergreen needle-leaved forests of Hokkaido. It was not admitted that the number of Hazel Grouse is on a declining trend in this study area.